

# 佛蘭西書巡覧 19

平山 弓月

たかが子供のための本とばかりに『星の王子さま』を侮る向きも、いわゆるおとなの読者のあいだにはあるようである。しかしながら、この本をフランス語原文で何度も読み返せば分かることだが、これは第一級の文学作品といっても過言でない作品である。

(稲垣 直樹)



子どもの頃に、『星の王子さま』を読まれたことと思います。また、何度も繰り返し読まれた方もいらっしゃるでしょう。瞼を閉じれば、あの独特の挿絵の数枚が、浮かんでくるでしょう。いろいろな言葉に翻訳されて、世界中で読み継がれているというの、宣なるかなと首肯されます。

「ずっと以前まだ子供だったころのその人に、この本を捧げることにしましょう。おとなはだれだって最初は子どもだったのですから(でも、そのことを覚えているおとなはほとんどいません)」との献辞を付け、**アントワーヌ・ドゥ・サン＝テグジュペリ Antoine de Saint-Exupéry(1900-44)**は亡命先のアメリカで、**Le Petit Prince『星の王子さま』(1943)**を生み出しました。そのあと、彼は連合軍の一員として第二次世界大戦に従軍し、偵察飛行に飛び立ち、地中海の藻屑と消えてしまいました。

ここでは『星の王子さま』の、心ひく言葉のいくつかを読んでみましょう。一つ目はやはり次の、王子さまと出会ったキツネが教えてくれた「秘密」でしょう。

*Voici mon secret. Il est très simple : on ne voit bien qu'avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux.*

これから、ぼくの知っている秘密を伝えてあげるよ。とても簡単なことさ。心で見なければ、よく見えてこない。大切なものは目には見えな

いんだ。

私たちは、目で見たものを絶対だと考えがちです。「自分の目でしっかり見なさい」とよく教えられました。しかし、日常を見回せば、「目に見える」表面的なことやものが、必ずしも正しいとは言い切れないとの経験があるでしょう。「心で見る」というのは、何の先入主もなく、言ってみれば「子どもの目」で見ることだと思います。おさな児の言葉や発想に、はっとさせられるのはこれが故だと言えるでしょう。

*Tu sais... ma fleur... j'en suis responsable ! Et elle est tellement faible ! Et elle est tellement naïve. Elle a quatre épines de rien du tout pour*

*la protéger contre le monde...*

ねえ…、ぼくの花…、ぼくはぼくの花に対して責任がある！ぼくの花はとっても弱いんだ。それに、ぼくの花はとっても無邪気なんだ。世界から自分の身を守るのに、役にもなんにも立ちっこないトゲが四つあるだけなんだ…

王子さまは、自分の星に咲く「プライドの高い花」の要求に愛想が尽きたようで、自分の星を後にすると決め、花に別れを告げます。と、花は、王子さまに対する愛を告げ、「そのことに、あなたはまるで気づいてくれなかった」と言葉を継ぎました。後になり王子さまは、あれこれの「するい言い方の裏に、花のやさしい心がちゃんとある」ことに気が付きます。その花の心を、王子さまは「心でみなければ」ならなかったのです。花に対する「責任」とは何でしょうか。どうすれば「責任」を果たせるのでしょうか。私たちはこの「責任」を考えなければなりません。王子さまと花との関係は、私たちの周りにも、いくつも見られるのではないのでしょうか。

もう一つ、きわめて私事に関わりますが、私にとっては思い出深い言葉があります。酒飲みの星を訪ねた王子さまは、酒を飲む理由を問い詰めます。王子さまの問いに対する酒飲みの答です。

*--- Honte de boire ! acheva le buveur qui s'enferma définitivement le silence.*

「酒を飲んでいることが恥ずかしいのさ」というなり、酒飲みは黙りこくり、そのあとはもう一言も口を利かなくなりました。

本学の語劇祭でフランス語研究会はこの物語を舞台にのせました。顧問である酒飲みの私に与えられたのが、この酔っ払いの役でした。にもかかわらず私は、恥を知らずに今も飲み続けています。

(本稿を成すに、引用部分の訳文を含めて、稲垣直樹先生の御著書『星の王子さま』『星の王子さま』物語』(ともに平凡社刊)を参照させていただきました。)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)